

いずみさの昔と今 第291回

「泉佐野に残る家相図③」

今回は泉佐野に残る家相図のうち、現在開催中の冬季展にて展示中の家相図について紹介します。

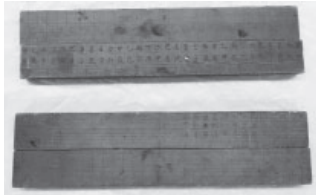
泉佐野に残る家相図は庄屋・武家・宗教者・商人など様々な身分の家で作成されており、まずは武士身分であった中庄新川家の家相図を取り上げます。新川家は、村政の中核に関わる有力な家のひとつであり、江戸時代初期には小堀遠州の代官として活躍しました。家相図添書には、「鑿 四縁命主人曰一夫當宅雖長相統有浮沈」。「陰陽以理會通撰順逆無變化極方道位、不非者天下至續執能知之粗聚惡之氣可避ト云々」とあり、紀州増田氏による鑑定、冒頭には九星説の診断が記され、その後ろに「長く相統される家であるが、浮沈があり、新たに鑑定を行うと悪気を避ける」という旨が書かれています。当主の相続が屋敷の相続があり、それを機に家相によって家運の改正を企図したと考えられます。

明末裔）が発行した江戸時代の天気占いが残されています。武士と商人の違いはあれど、占いに関する関心は共に高く、自身の家の運勢の吉凶を気にしていたことがわかります。

次に庄屋家の家相図をみてみます。菊家は俵屋新田村の年寄を務め、文政9（1826）年に菊太兵衛（四郎右衛門）が庄屋に就任して以降、幕末まで代々俵屋新田の庄屋を務めました。同家の家相図にある「千天保十四歲次癸卯十月吉辰平安松浦豊齋改正」から庄屋就任の17年後に作成されたことがわかります。この図では、大戸口左わきの便所を「大凶」、その前方の二棟を凶相が出てくるから追々一棟に建て直すべしとの鑑定がなされています。ほかに屋敷北側には「此辺建物有ほど宜し」と建物や空いている部分に建てれば吉や、御成門に「吉相」など細かい鑑定が見られます。鬼門にトイレを作るなどよく言いますが、江戸時代の庄屋屋敷でも同様に気にしていることがわかります。

江戸時代の家相には「定理的家相方」「干支方鑑」を主張する松浦東鶏派と「易断的家相方」「九星方鑑」を主とした家相鑑定を行う古暦派の2系統がありました。後に松浦琴鶴が登場すると松浦琴鶴派が新たに分派します。泉佐野に

残る家相図には、菊家の家相鑑定と同様の松浦を名乗る家相見や、紀州増田氏、また日根野村の神藤家の場合は紀州陰陽師曾和氏と大坂や和歌山の家相見や陰陽師によって家相鑑定が行われたものが残っています。現在でも引越越し、増改築などで恵方・鬼門を耳にする機会が多い家相ですが、江戸時代では家相に関する書物が一家に一冊あるほど身近なものでした。家相の流行の背後には、識字率拡大や出版業界の隆盛などがあり、それまで秘伝としていた占い書・家相書が一般に出回ったことがきっかけとなったといえるでしょう。今回紹介した家相図は数多く残るものの一部であり、今後もまたの機会に泉佐野に残る家相図を紹介していきます。



▲占いで使用した算木

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの ☎469-7140 Fax469-7141
休館日 月曜日、祝日（祝日が月曜日の場合は月曜日と火曜日が休館）
開館時間 午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
入館料 無料

日本遺産・中世日根荘を巡る⑧ ～絵図編（7）「十二谷池」～

「日本遺産」に認定された「旅引付と二枚の絵図が伝えるまち—中世日根荘の風景—」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介いたします。

問合せ先 文化財保護課



▲日根野村絵図に記された「住持谷池」

現在の十二谷池

日根野村絵図に記される「住持谷池」と、井原村荒野開発絵図に日根野丘陵部に一つだけ描かれている池は、現在の「十二谷池（じゅうにたにいけ・じゅんだにいけ）」と考えられています。榎井川から取水した井川（ゆかわ）から用水を確保し、大池と二分する日根野地区の田畑の主要水源となっていました。

この十二谷池は、応永26（1419）年に干ばつ対策として隣接する下池（質池）を築造したときの史料に、井川の用水を取り込んでいる記述を確認できることから、日根荘の立荘時には井川と繋がっていたとみる説もあります。室町期の永享3（1431）年には、日根野村・井原村・檀波羅密寺村の村落間で日根野村内にある十二谷下池の水利配分や管理を決めた用水契約が結ばれています。十二谷池は佐野村・鶴原村にも送水し、泉佐野市北部も灌漑しました。



※絵図の写真は、歴史館いずみさの所蔵の複製を使用（原本は宮内庁書陵部所蔵）